

氏 名	ALBERT, GUILLAUME NICOLAS J.
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲 第 194 号
学位授与年月日	2016年6月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	The Diversification of University Entrance Examinations in Japan and High School Students' Perceptions of Merit (大学入試の多様化と高校生の能力に関する意識)
論文審査委員	主 査 教 授 LANGAGER, Mark W. 副 査 教 授 石 生 義 人 副 査 教 授 西 村 幹 子

論文内容の要旨

本論文は、多様な大学入試における能力主義について、東京都内の私立高校 13 校において高校生の認識を分析したものである。1960 年末の「推薦入試」導入に始まり、1979 年に導入され、後に「センター試験」となる「共通一次試験」、そしてより近年に実施されている「特別入試」や「AO 入試」（「AO 入試」は 2000 年より正式に開始）に代表されるように、過去数十年の間に日本の高等教育機関により採られてきた入試の多様化は、現行の政策の潮流を示している。能力は完全に標準化された試験のための勉強に必要な努力の測定を基盤とし、全国民が有する努力するための能力は同等であるという荻谷(2000)の「日本型能力主義」の概念に則り、アルベール氏は「努力としての能力」が今日の日本における能力主義の理想を的確に説明していないと主張する。東京都内の 2 つの高校における生徒へのパイロット調査を実施した上で、アルベール氏は偏差値を基準にした 3 つのレベル別に選定された 13 の私立高校において質問紙調査を実施した。質問紙調査および自由記述欄における回答、3 つのフォーカスグループインタビュー、教師のコメント等を記録したフィールドノートを用い、本稿は、現行の大学入試制度に最も影響を受けている高校生の「能力」に関する認識は、「努力としての能力」と単純に捉えられない、より複雑なものであることを立証している。標準化された入学試験のための勉強に費やす努力は 4 つの能力の構成要

素（挑戦、平等性、得られる知識の有用性、適切性）の基盤としては正当性が高いと判断されたものの、かなり多くの生徒が、より特徴のある入試や予想に反して AO 入試を多様な経験や背景に基づいて能力を評価する適切な手段として見なす可能性が高いことが示された。興味深いことに、内部推薦制度（附属の大学への進学）は、能力の 4 つの構成要素のすべてにおいて最も正当性が低いと認識されていた。

主要な調査結果

標準化された一度きりの記述試験は、記述統計結果において最も「能力」（4つの構成要素で測った場合）として認識されており、今日の「日本型能力主義」における最も正当性の高い入学試験として強い合意が得られていることを示した。しかしながら、入試形態の標準化の軸において最も「より特徴のある」側にある入試形態もまた統計分析の結果においてかなりの正当性を得た認識となっていた。ただし、自由回答欄の分析においては、選抜過程における教員の不公平さを支持する回答が見られ、試験の主観性、生徒らへの理解という意味でそれらの正当性には疑問が残るとも考えられる。

試験形態の歴史が長いほど能力を基盤としていると見られているとの期待は支持されなかった。1967年に導入された推薦入試は、より近年導入され、より特徴のある AO 入試よりも能力を基盤としていないと生徒には捉えられている。自由回答欄の分析によれば、AO 入試は異なる受験者のスキルを調査していると見られていた。AO 入試を支持する生徒は人物やスキルの多様性を強調し、支持しない生徒は学力レベルを低化していると批判する。

各入試形態について能力を基盤としていると思うかどうかを従属変数とした順序ロジスティック回帰分析結果において、5%の有意水準で統計的に有意な比較的影響力のある結果が出た説明変数としては、本人が選択した入試形態、自己申告による勉強時間、高校の偏差値、努力イデオロギーへの信念、性別が挙げられる。さらに、生徒は第一志望の大学の入試のために自分が選んだ入試形態を高く評価する傾向があった。逆に、経済資本、自

己申告による成績、内部推薦の選択肢の有無は殆どの入試形態において統計的に有意な結果とならなかった。

週に30時間以上勉強していると申告した回答者は、標準化された記述試験を高く評価し、週に25時間以上勉強していると申告した回答者は、その他の入試形態に対して否定的な見解を持つ傾向にあった。偏差値が最も高い高校の回答者は、偏差値が中程度の高校の回答者と比較して、標準化された記述試験に対して否定的な見解をもち、AO入試に関しては肯定的であった（有意確率1%水準）。偏差値が低い高校の回答者の批判は、偏差値が中程度の高校の回答者と比較して、標準化された試験形態に向けられ、標準化された記述試験の平等の要素に焦点を当てていた。努力イデオロギーへの信念は、その影響力は弱いものの、すべての入試形態の平等性とセンター入試を除くすべての入試形態の適切性に対して繰り返し統計的有意さを示す要因であった。最後に、女子は標準化された入試の「挑戦」と「有用性」の要素およびより特徴のある入試形態の「適切性」と「平等性」の要素に関して男子よりも肯定的である傾向が見られた。

定性的な分析においては、生徒たちは標準化された記述試験を能力を縮小して捉えていると見ているが、選抜の手段としては納得がいくと考えていることが分かった。しかしながら、彼（女）らは、推薦入試、特に内部推薦入試を大学入試選抜の過程における高校の役割という観点から信頼できないとし、高校が推薦する候補者の選抜基準に度々納得がいかないと考えていた。ただし、推薦入試は全体的な評価であり、長期にわたる努力を評価するものであると捉えられていた。能力に対して完全に異なるアプローチを取るAOは、特に選抜基準という意味において混乱を生んだが、能力を測る良い全体的な方法で、受験者の強みを打ち出す機会を与えるものではあると見られていた。高校は生徒の相談や進路指導においてさまざまな戦略を練っており、入試に関する生徒の考え方を方向付ける役割を担っていることは明白であった。

ディスカッション

本博士論文は、日本において大学入試の選抜手段の土台となってきた能力主義について、先行研究において反映されている見解を微調整する必要性を主張している。より特徴のある入試形態が、現在さまざまな基準を用いて実施されており、標準化された記述試験のように厳格な平等性を保証することはできないが、この観点は本質的には特に受験者が自らの強みをアピールできる AO 入試の場合には論理的であると考えられていた。生徒の回答者の努力イデオロギーへの支持は軽減されており、努力は重要でありつつも、大学入学における成功、不成功を説明する唯一の要因ではないとの認識を示している。本論文の主要な分析結果は 13 校の高校における質問紙調査を基にしているが、定量的データに示されたさまざまな入試形態における能力の認識を確認し、よりよく理解するために定性的なデータが重要な役割を担った。同データは、荻谷の日本型能力主義からの変化を確認するためにも役立った。教員と生徒の語りにおいて、いかに能力を定義し、測定すべきか、という点において葛藤が残っている。これらの葛藤は選抜制度を多様化する高等教育における国際的潮流に照らして論じられるものであり、現在更新されるべき「能力」に対する理解においても、この潮流の示唆が検討されている。

論文審査結果の要旨

高等教育は、大学就学年齢期の就学率の上昇とともに、米国・フランス・日本ばかりでなく他の先進諸国や発展途上国や新興国などにおいても過去数十年にわたる大衆化を経験してきた。この傾向は、平等主義の民主主義社会にとって根本的な、近代からの能力主義の考え方に新たな問題を投げかけてきた。大学がより多くの人々に開かれたことによって、受験生が持ちうる多くの種類の能力を考慮して、入学選抜方法は多様化してきた。日本の場合、一般入試、センター試験、内部・非内部推薦、特別入学、AO入試などの入学選抜方法が登場し、それぞれが異なる選抜基準と対象受験生から成り立っている。このような近年の状況の下、日本社会、特に、大学受験生が、今日の選抜方法に対してどのような能力主義の原則を見出しているのかという疑問が生まれる。

日本の教育価値観は、多くの場合、大学受験者の高校および入学試験準備期間における詰め込み努力の成果のみに置かれていると言われてきた。特に、刈谷（2000）は、努力イコール能力という倫理観に基づく能力主義を「J-モード能力主義」と呼んだ。入試選抜方法の多様化傾向、および、それが非伝統的な形の能力の存在を認めることを一部の大学受験者に持たせることになる可能性を鑑み、アルベール氏は、多くの研究者が指摘する日本の平等主義的価値観および努力思考を分析した。

入学選抜方法の多様化によって最も影響を受けているであろう東京都内の私立高校（13校）に在籍する生徒を対象として、アルベール氏は質問紙調査を実施し、1200名を超える高校生から回答を獲得し、計量的（ロジスティック回帰分析）および質的分析を行った。また、上記の高校の内3つの高校でフォーカスグループ調査を実施し、分析結果の解釈をより意味あるものとした。

混合法（QUAN=qual）を使用し（Gay, Mills & Airasian, 2009）、実証分析を行うことによって、アルベール氏の研究は、日本における努力型能力思考に関する従来の前提に疑問を呈することに成功している。結果として、私立高校生達が持つ能力に対する認識に関して、従来の見解とはやや異なった意味合いを持つ、暫定的な文脈理解に至っている。

る。この理解においては、高校生達は、今日の日本の高等教育環境において、自分の進路を計画し、取り得る戦略を見据えて努力に励んでいることが見取られる。アルベール氏は、能力に関する高校生の認識を説明する背景変数（個人戦略・性別・高校のランク）を抽出した。教育者によって認識されている能力の根拠に依拠するのではなく、アルベール氏は、教育の消費者である高校生を研究の対象とし、今までに研究者に当然視されていた能力に関する思考について、やや異なった意味合いを持つ理解を確立することに成功し、日本の教育思考に関わる従来の見解に対して、新たな見解を提示している。アルベール氏の分析によると、努力思考は健在であるが、努力イデオロギーが必ずしも支配的ではなく、他の正当な形態の能力（個人の背景や経験に基づいた能力）も認められるようになってきていることがわかり、それらが大学受験を控えた日本の若者の現在の思考を特徴づけている。

アルベール氏は、日本の能力主義に関する従来の見解に対して新たな見解を提示しただけでなく、教育関係者中心の見解から、制度の消費者である生徒の見解に焦点を移した。アルベール氏の研究は、日本の教育的思考の現状理解を向上し、消費者（生徒）の視点をさらに実証研究対象とすべきであるとする研究課題の第一歩となった。

国際基督教大学の教育研究棟 247 号室で、5 月 24 日午前 10 時 10 分から 11 時 20 分まで開催された最終口頭発表・試験において、アルベール氏は、最終稿の内容を要約の形で発表し、中間報告時点で指摘されていた問題点について適切な対処したことを報告した。また、3 名の審査員からの本研究・方法論・調査の限界に関する質疑に的確に回答した。その直後に、審査員は評価作業に入り、本研究の長所と短所を吟味し、国際基督教大学大学院アーツサイエンス研究科の博士号の学位を授与するに値する論文であるという結論に全会一致で達した。